哲學研究
第三百八十五號　第三十三卷　第四冊

アリストテレス存在論の基礎構造について（承前）

岡野留次郎

六

アリストテレスの範疇導來の動機に關する論究について、一つのエポックを作つたのは、云ふ迄もなく、かのトランデレンブルクであるであらう。範疇成立の根據を文法に求めやうとした彼の說は、[1] 確かに二つの重要な見解であり、又一應何人をも首肯させるに足る尤もらしさを備へてゐる。何故なら、確かにアリストテレスの範疇と文法上の品詞との間には、或種の類緣を持つて居るからである。しかし、ボーニッツが既に道破したやうに、彼の綿密な考證や論證に拘らず、文法と範疇との間の對應は決して充分ではない。範疇を文法の形式から悉く導來することは不可能なのである。兩者の間に或程度の對應や類緣があるからと云つて、我々は直ちに、一を他から導來したとは云へないのである。これに對して、ガイザーは、アリストテレスが範疇の概念に導かれたのは、認識論的問題であつたと考へる。卽ち、認識は存在を對象とし、これを完全に且つ明確に把握することを目指すものであつて、この目的を達成するための最も一般的な假定こそ範疇に外ならないので、從つて科學的認識を可能ならしめる有ゆる對象構成のための基礎概念として、一定數の範疇が導來せられなければならぬ。[2] 此ガイザーの見解は、アリストテレス存在論の認識論

的要素を取出し高調する結果、形而上學の一般的基調をなして居る存在論的傾向を不當に抑壓して居るかに見える。現に彼は對象構成の基礎概念として範疇を理解すると同時に、現實存在が存在として種々の在り方に於て在ること、その種々の在り方の最も普遍的な形態であることを他方に認めて居るのであつて、こゝに存在論的見地が認識論的な見地よりも先に、根底に置かれて居なければならぬことを知るのである。

扨てアリストテレスの範疇が、文法的にもまた認識論的な要請からも導來し得ないとすれば殘る道は、存在論的な動機に求める外ない。元來アリストテレスの體系に於ては、一方極めて分析的な鋭利な思惟が働いて居ると同時に、他方には現實的な經驗に最終の基礎を求める實在論的な要求が強く働いて居るのであつて、從つて、その方法に於ても內容に於ても、この兩傾向の交錯から來るアポリアが見出されるのであるが、此アポリア解決の道は、この兩傾向を、それぞれ別個獨立な、場合によつては互に矛盾する二つの傾向と見ることによるのでなく、實は、この二つの異つた傾向と見られるものの根柢に、彼獨自な存在論的方法並にその內實の展開が藏されて居るのであると理解しなければならない。例へば彼の論理學は、單純な形式論理と見るには餘りに存在論的な要素を含み過ぎて居るし、彼の形而上學も、單純に實在論なのではない。寧ろ現實存在の論理を通して、超現實的なものへの通路を開拓しやうとした哲學的努力であると見做し得るのである。

ツェラーは、その著「希臘人の哲學」に於て、[3] アリストテレスの範疇は、我々の經驗に與へられたものを、事實的に考察する主要見地（Hauptgesichtspunkte）を、單純に取上げたに外ならないとする。この見解は極めて平凡ではあるが、ボーニッツが、範疇はアリストテレスに於て、經驗的な方法で見出されたものであると主張するのと同じく、[4] 寧ろ眞相に近いものではないか。勿論、主要見地とは何を意味し、如何にして決定せられるのであるかと云ふ問題、或はボーニッツの經驗的な方法の具體的內容と云ふものに迄立ち入つて考へてくると、これ等の解釋は決して充分な滿足を與へない。只文法的な聯關や、論理的な原理から導き出されたものでなく、經驗そのものから、存在その

ものの本質を明にしようとする存在論的な動機から範疇は見出されたのであると見る說を穩當と考へる。尙この點については後に詳論するであらう。

範疇導來の原理に關しても諸家の意見は區々であるが、我々は後に述べるやうな理由からして、ツェラーやカントのやうに、アリストテレスが、その範疇の演繹をなすに當つて、確乎たる原理を持たなかつたとする說には一應の疑問を提出し得る。尤もカントの範疇の說明に見られるやうな、確乎たる論理的演繹原理と、秩序整然たる演繹の遂行とを、アリストテレスに見やうとするのは無理である。しかし、このことは、主觀的で且つ觀念論的傾向の濃厚であつたカントの存在論と、客觀的で且つ實在論的傾向の强かつたアリストテレスの存在論との差異を示すに過ぎないので、カントが批難するやうに、「出會はすまゝに採集めた」と云ふが如きは、同情あり理解ある見解とは云へない。少くとも彼自身の範疇が、判斷形式から導き出されたことによつて、その整然たる秩序を誇るが爲に、客觀的な卽物性を犧牲にすることはなかつたかと云ふ非難に對する名譽ある防壁とはならないであらう。流石にツェラーは、「或種の論理的進展」[5]を認めることに於て、歷史家としての客觀的忠實さを示して居るが、體系的にアリストテレスを考究し、その內面的動機に迄立入らうと願ふ我々に取つては、これだけでは滿足し得ない。此點に關して詳細綿密な論究を行つて居るのはブレンタノである。彼に於ては、アリストテレス範疇演繹の原理は、「第一實體に於ける種々異つた存在の仕方」(die verschiedenen Weisen der Existenz in der ersten Substanz)である。卽範疇は、第一實體の最高賓辭である限り、第一實體への關係の仕方の相違によつて、相互に區別せられ、これを原理として、整然と演繹せられる。[6]我々は今彼の試みた演繹の內容に迄立入ることは差控へやう。只彼の打立てた演繹原理は、重要な示唆を與へるには充分ではあるが、深くアリストテレスの存在論的思惟動機に迄觸れたものかどうかは疑問であることを一言述べて置かう。

最後に範疇の數に關しても、プラントゥルのやうに、アリストテレスは、範疇の一定數に限定することに何等重點

を置いたものでなく、只無制限でないと云ふことのみが重要だとなすもの、[7] 或はトランデレンブルクのやうに、一定數の文法的品詞から導き出した以上、十個の最も一般的な實辭は確定的な數と考へるもの等種々見解を異にする譯であるが、此點については、從來述べて來た他の諸問題と最も密接に聯關するが故に、我々は、之等の諸問題の解決への試みと一括して論ずることにしようと思ふ。

註(1) Trendelenburg, Elementa logices Aristotelicae.; ders., Geschichte der Kategorienlehre.
(2) Geyser, op. cit. S. 119-122.　(3) Zeller, Philosophie der Griechen. 4 Aufl. II. 2. S. 265.
(4) Bonitz, op. cit. S. 642-643. 藤井氏譯一〇二頁——一〇五頁。
(5) Zeller, op. cit. S. 265.　(6) Brentano, op. cit. S. 144 ff.
(7) Prantl, Geschichte der Logik, S. 206 f.

七

我々は、先に、アリストテレスの存在論は、我々により明なより知られたものから出發するのであるが、それは、日常的感性的な體驗に與へられる感性的な存在の世界から出發することを意味するのであると云つた。またかやうな感性的な存在の存在論的な本質構造を明にするには、この云はゞ存在體驗とも云はるべきものの根底に先存在論的體驗が、我々にとつてより明なより熟知されたものとして、しかし本質的にはより不明なより知られないものとして、共に與へられ、それが存在論的な反省によつて、存在論的な概念に迄、明瞭に分節せられゆくことによつて可能とせられるとの意味を述べたのであるが、若しかやうな解釋が許され得るならば、アリストテレスの範疇が如何なる動機から導來され、又如何なる演繹原理を持つべきか、その本質、その範圍等も自ら明となるのではないかと思はれる。

即ち、ガイザーやトランデレンブルク等の主張する認識論的乃至文法的な動機は、これを全然否定する事は出來な

いとしても、根本的・本來的のものでなく、本源的には飽く迄存在論的であつたと見なければならない。アリストテレス存在論の出發點をなすものは、飽く迄感性的な個物的現實存在である。かやうな現實的個物は、單獨に存在する譯ではない。それは他の個物と世界に於て現實的に相聯關し、互に運動するもの、變化するものとして、互に働きかけ、られ、かくして世界内に於て、自己存在を確立すると共に、世界存在となる。かやうな現實的個物が、世界内に於て存在する場合の本質的な存在形態こそ外ならぬ範疇であると考へ得るならば、アリストテレスは、彼の存在的・存在論的體驗に於て與へられるところのものを、彼獨自な理性的直觀力と分析的思惟能力によつて、與へられるがままに取上げ、且つ數へ上げたのであると解し得られないであらうか。右のやうな見地からすれば、アリストテレスが、範疇の演繹に當つて確乎たる原理を持たなかつたとするのは皮相な見解と云はなければならぬ。又ツェラーの云ふやうな「或種の論理的進展」の如きも、深く内面的動機を考察しないものと云ひ得るし、ブレンタノの演繹の原理の如きも、表面的な形式論理的關係に終始して居り、深い存在論的聯關を把握しないものとも評し得るであらう。

人間は、本來、歴史的行爲の主體として、常に歴史的現實の中に生き、且つ働くところの存在であり、この歴史的現實の世界に於て、行爲によつて自己存在となり、同時にまた、世界内存在となる。彼は、云はゞ、自己存在となることによつて、世界を創造しゆく。或は、世界の創造的行爲に參與することによつて、自己存在となりゆくものである。かやうな歴史的現實の意味が、ギリシア時代に於ても存したかつた譯ではない。凡そ人間存在が、自己存在を世界に於て自覺する時、哲學的思索の濫觴を見るものだからである。ステンツェルは、「古代の形而上學」に於て語つてゐる。「我々は單に、ギリシア人の理論的教説の中に、何が意味されてゐたかを理解するに止まらず、その直接な世界體驗と理論との聯關をも把握しなければならぬ。ギリシア人が、理論前的・理論外的な態度に於て、彼等の世界内に於ける存在を如何に理解し、表現したかを認識し、これを存在の理論的教説との聯關に於て理解するやう努力しなければならぬ」[1]と。我々は、アリストテレスの理論的教説の背後に、その直接な世界體驗の潜んで居ることを知り、

それとの聯關に於て、彼の存在論を理解しなければならないのである。只彼の世界體驗が、我々が今述べたやうな歴史的現實の意味理解に於て透徹してゐたか否かは疑問である。彼の存在論的思索の基礎に、現實的個別的存在主體の世界内に於ける具體的存在とその體驗が、彼の理論的教説の背後に存し、しかも、この個別的な存在主體は、勝れて主體的な人間存在に方位づけられてゐたとは信じ得るけれども、彼の形而上學の基礎に自然學が横はる限り、――この點については後に詳論するであらう――、自然學に於ける運動體卽ち自然的個物との類推に於て、自ら客體化せられ、主體性は、その純粹性を失ひ、主體と客體的世界との矛盾對立的意義は、云はゞ卽自的な形態に平準化せられたと思はれる。卽ち彼に於ては、人間存在の主體的性格が、暗々裡に意識せられ、それが範疇の導來の動機に於て、又演繹の原理に於て、またその本質規定に於て、指導的な意義を持つてゐたに拘らず、人間存在の存在論的性格が、充分明確に把握されず、他の非人間的存在、例へば動植物或は人工的制作物と共に、個別存在主體として、同一なウシア的存在性格を持つのである。[2] ウシア的性格とは、現實的存在が、個別的な存在主體として、他の個物と共に、世界内に存在することを意味するのである。

以上のやうな見地から、アリストテレスの範疇を考察するならば、その導來の根源・動機・その本質的意義・演繹の原理・その範圍等について、自ら別個の立場が開けるであらう。

さきに我々は、かの第七卷の冒頭の範疇的存在についてのアリストテレスの言明を引用した。そしてそこで範疇的存在に二種の區別がなされて居り、一つは主語的性格を帶びたウシアの範疇、他は述語的性格を帶びた附帶的範疇であることを述べた。所で、この二種の範疇の對立は、單に主語的と述語的の對立を意味するに過ぎないものであらうか。我々はその根柢に存在論的な區別を見出すべきではなからうか。主語的範疇とは、實は、個別的存在主體が、自己を世界内に於て、かやうなものとして確立する自己限定の形式であり、所謂述語的な範疇は、かやうな個別存在主體が、客體的な存在世界内に於て、これとの聯關に於て、自己の世界存在性を確立する、云はゞ世界的存在として自己

を限定する形式に外ならない。勿論兩者は、或意味に於て對立するが、或意味に於て相補足するのであつて、對立することによつて、統一せられ綜合せられると云つてもいゝ。即ち、個別的存在主體が、自己を主體的に限定することは、同時に自己を世界存在として、世界内に於ける自己存在を確立する意味を持つのであつて、世界を離れて自己はなく、また自己を離れて世界もないとも云ひ得るのである。從つて、この兩範疇は、個別的存在主體を中核として、見出されるものではあるが、やがて世界存在そのものの存在性格、存在構造を示すものと云へる。

範疇をかやうな基礎存在論的な意義を持つものとして解釋することには、多くの反論を豫想しなければならない。第一のそして恐らくは最も根本的な反對は、アリストテレスは、かやうな範疇の意義を、彼自身の著作の何處に於ても明に說いてゐない。それは單なる憶測の範圍を出でないであらうと云ふことである。勿論アリストテレスは、かやうな意味を特定の場所で明に說いてゐないことは事實である。しかし、彼の存在論の内面的動機に深く眼を注ぐとき、かやうな解釋が、彼の著作の至るところに於て支持されなければならないことを證示し得るやうに思はれる。範疇なる言葉は、勿論、判斷や命題の實辭的敍述を意味する場合があらう。また、存在の最高類を意味することも固より誤りではない。しかし、問題は、それが本源的に「形而上學」に於て展開された範疇の意義であつたかどうかである。ツェラーが、範疇は、主觀的概念でなく、實在概念であると云ふ。勿論それは或意味で正しい。しかし「範疇とは、實在概念であるよりは、寧ろそれを持込むべき Fachwerk である」[3]と云ふのは、「或種の實辭概念に對する場所」と云ふ意味と思はれるが、これ等の解釋は、アリストテレス存在論の動機を充分に理解したものと云へないと思ふ。アリストテレスの範疇は、固より單なる主觀的概念でないことは明であるが、事物の實證的な所與性に從つて、その實在的な性質を記述表現する實在概念に止まるものではない。さりとてかやうな實在概念を持込み得る Fachwerk とする思想は、範疇の最高類たる性格を示さうとする意圖ではあらうが、範疇の本源的な意味に迫るものと思はれない。範疇は、飽く迄、存在論的基礎概念として理解すべきものと思ふ。即ち、ウシアの範疇とは、現實的・個

別的實有が、自己をかやうなものとして、世界内に於て主體的に限定する、存在論的な根本形式である。本來無限定な質料が、主體的範疇たるウシアの範疇によつて、自己の個別性・實有性を確立するのである。所で、個別的實有の主體的限定は、同時にそれが、世界内に於ける自己限定である限り、世界環境に於ける自己の世界的限定と相伴ふ。このことは、個別的實有が、變化と運動に從屬すると見られて居るアリストテレスに於て、特に當てはまることなのである。個別的實有は、世界内に於て、單獨に存在するものではない。自ら運動し變化しながら、他の同じく運動し變化しつゝある個別的實有と、互に關係し、互に影響し合ひ、一定の存在論的秩序の下に存在するのである。從つて、個別的實有は、他の實有に對し、世界環境に於て自己を定位づけることによつて、自己の主體的存在を確立するのである。即ち、感性的存在は、單に感覺的・知覺的に與へられて居ると云ふだけでなく、それが、他の感性的存在に對し獨立的な個別性を持ち、主體的・基體的な實有性を持つと共に、或は或色を持ち、或堅さを備へ、滑かな表面を持ち、或は甘い味を持ち、其他種々の性質と分量を持つものとして、一定の場所に於て、一定の時間的存在として、一定の狀態に在るものとして、他の存在に對し、能働的に或は受働的に關係し交渉し、かくして相互に存在論的秩序の下に關係し合ふことによつて、個別的實有は、自己を世界的存在として確立するのであつて、ウシア以外の範疇は、個別的實有が、世界環境内に於て、自己を云はゞ世界内的存在として確立する存在論的根本形態に外ならぬものである。從つて、範疇の範圍・その數に於て、多少の動搖が有り得るとしても、それは原則的にそうあるべきことを示すものでなくして、我々の存在論的體驗の深みに於て、我々の哲學的省察と分析とが、必然的に出會はさゞるを得ない困難のためにそうあるに過ぎないのである。況んや範疇演繹原理が不明のため、或は驗驗の中から、單に無秩序無方針に選擇し取出した結果であるがためではない。演繹原理は、個別的實有の世界内に於ける存在の仕方であり、「第一實體に於ける實有の種々なる仕方」と云ふ如きものではない。

勿論以上の見解は、明白な語句に於てアリストテレスによつて主張されて居る譯ではない。寧ろ表面的には、範疇

と文法や論理との形式的聯關が、より多く論ぜられ問題とせられたとも云ひ得るであらう。しかし、アリストテレス存在論の根本的な構造に思を致す時、右のやうな解釋を入れない限り、本質的な理解の道を失ふと思はれるのである。しかし、これ等の主張は、アリストテレスの原典に即して、更に詳細に論究の歩を進めない限りは、客觀的な根據を持ち得ないであらう。しかも、範疇のかやうな存在論的意義を明確に論述することが、やがて、アリストテレス存在論の基礎構造を明にすることとなる、否少くとも、その最も重要な部分を闡明することになると思はれるのであるから、我々は次にこの問題に突き進まう。

註(1) Stenzel, Metaphysik des Altertums, Einleitung.

(2) Vgl. Cat. 5, 2b 26-28. (3) Zeller, op. cit. S. 262 Anm. 2.

八

扨て、ウシアの範疇は、「範疇論」に於ては、次のやうに定義されてゐる。[1]「ウシアとは、勝義に於て、又第一義的に、そして最も正確に云へば、何等かの基體について語られるものでもなければ、又何等かの基體の中に在るものでもない。例へば、或一定の人間、或は、或一定の馬のやうに」[2]と。此定義に於ては、ウシアの獨立的な主體的・基體的自己存在が高調されて居る。即、ウシアは、自己以外に何等か他の基體を持つものでなく、却つて自らが、他の凡べてのものの基體となることによつて（ὅτι τὸ τοῖς ἄλλοις ἅπασιν ὑποκεῖσθαι）、又他の凡べてが、これを主體として表現し得ることによつて（πάντα τὰ ἄλλα κατὰ τούτου κατηγορεῖσθαι）、或は、他の凡べてが、このものの中に在り、獨立な存在を持たないと云ふことが、ウシアをして第一義的なウシアたらしめる條件であることが示されて居る。[3]しかも、かやうな主體的な性格を持つウシアは、同時に、一定の個別的な存在であることが、その擧示された

例によつて明示されて居るが、同時に、「凡べてのウシアはトデ・ティを示すと思はれる」[4]と云ふ言葉によつて明示されて居る。所が、「人」或は「動物」のやうに、種或は類を示すものも、アリストテレスによつて第二義的なウシアとして許されて居るのであるが、それがウシアたる名を許されるのは、第一義的なウシアを定義的に限定する場合、他の如何なる實辭的限定よりも、最もよく、本質的な意義を表現するからであり、從つて「人」は「動物」よりも、此點に於て一層適正な定義的表現をなし得ると云ふことによつて、又、種は類の基體となり得るが、類は種の基體となり得ないと云ふことによつて、種は一層ウシア的性格を持つと云ひ得る。

以上の敍述から見れば、存在のウシア的性格は、何よりも、その主體的・基體的な性格にあることは明に看取され、種的全體・類的全體も、その性格を持ち得る限り、ウシアとも呼ばれ得るが、それは飽く迄第二義的であつて、第一義的なウシアは、個別的・現實的な主體的存在であることは明である。換言すれば、凡そ存在が、個別的・現實的・主體的性格を持つ時、それは第一義的にウシアと呼ばれる。卽ちこれは、先に引用した第七卷の冒頭に說かれたところによつて、存在が勝れて存在として自己を顯はにする存在の在り方であることを知る。存在は種々に語られ、語られるだけ存在の意味があると云ふことは、そう語られ、そう意味せられるだけ、その意味の根柢に、存在論的に自己を限定し、自己を顯はにする事實がなければならぬ。ウシアの範疇は、本源的には、かやうな個別的・現實的・主體的な存在の在り方を示す存在論的基礎形態でなければならぬ。卽ち、ウシアの範疇によつて、存在は一般に自己を個別的に現實的に又主體的に自己を限定するのである。しかし、このことは如何にして可能であらうか。

註(1) 範疇論は、周知のやうに、眞作か否かについて疑問が提出されてゐる。併しその內容が、アリストテレスのものであることには疑義は挾まれてゐない。そして我々の問題は、恰も內容に關するものであるから、眞作と見做して取扱つても、大して問題はないかと思はれる。

(2) Cat. 5, 2a 11-14.

(3) 「第一實有とは、他の凡べてのものの基體となることによつて、勝れてウシアと呼ばれる」(Cat. 5. 2b 37-3a 1)

(4) Cat. 5. 3b 10.

九

既に我々の論究したやうに、個別的實有がかやうなものとして自己を限定すると云ふことは、個別的實有の一構成原理をなす無限定的な質料が、他の構成原理をなす形相によつて限定せられると云ふことに一應理解せられるとすれば、この質料の形相的限定と云ふことが、如何にして行はれ、如何なる條件の下に可能となるかを研究することが、此の問題を解決する所以となるであらう。

扨て所謂第一質料なるものは、形而上學第七卷第三章に於ては、[1] 只消極的にのみ規定されて居るに過ぎないが、自然學第一卷第九章に於ては、積極的に規定せられ、「質料とは、各事物の第一基體であり、このものが內在的構成的要素として、各々の一定の實質的な存在がそれから生起して來る」[2] と述べられ、これによつて、第一質料は、すべての本質的存在の構成原理であり、その基體として、その成立の後に於ても、これに從屬し、所謂最近質料（ἡ ἐσχάτη ὕλη）となることが知られる。所で第一質料を限定して最近質料とするものは何であらうか。質料そのものが自らを最近質料に限定するのであらうか。或は何等かの形相的原理なのであらうか。アリストテレスが、或場所で、[3]「各々の事物が、それ自體として語られるものが、それのト・チ・エン・エイナイである」と述べて居るのを見れば、個別的實有を個別的實有として限定する原理は、形相的原理のやうにも思はれる。卽ち、ト・チ・エン・エイナイこそ、或もの（ὅπερ τι）、或現實的な個物（ὅπερ τόδε τι）を、そのやうなものとして限定する形相的原理であり、[4] そしてそれは定義的な限定を意味する。何故なら、定義とは、ト・チ・エン・エイナイのロゴスであり、ト・チ・エン・エイナイは、何よりも先づ第一に、そして端的に、ウシアに屬するものだからである。[5]

しかし、更に離つて考へるならば、ト・チ・エン・エイナイとは、個別的實有の形相的本質を意味する。所で、それが本質である限りに於て一般的と考へられる。一般的な本質がトデ・ティをトデ・ティとして限定する原理となると云ふことは如何にして可能であらうか。確かに、アリストテレスは、他方に於て、個性的原理を質料に求めたことは周知の如くである。カリアスがカリアスであつてソクラテスでないのは、その質料によつてゞあると考へられる。何故なら、そのエイドスは、分つべからざるものであり、二者に於て同一であるからである。[6] アリストテレスに於て、物の知識は、その一般的形相的本質を把握することを意味し、この本質は、プラトンのイデアのやうに超越的ではないが、しかも尙その如く不變であり、不生不滅とも考へられる。所が個別的實有は、それが感性的經驗に現はれる限りに於ては、常に變化し、生滅する。それ故、個物は一般的な學の對象となり得ない。認識に必要なのは限定性であり、形相的本質が學の對象となり得るのは、それが不變的な一般性を備へて居るからである。[7] 若しそうであるならば、かやうな一般性を本質とする形相が、同時に、變化と運動に從屬する現實的個物を、かやうなものとして限定する原理であるのは如何にして可能であらうか。このことは頗る理解に困難である。

此故に、ボイムカーは、アリストテレスの個體原理を說明して、「形相は統一的不變的であり、感性的知覺の對象たる個物は多數であり、且變化に從屬する。同一の形相が、質料の多くの部分に、種々に結合し得る可能性が、個體の多數を生起し得る理由である」[8] と云ふ意味を述べて居るのは、一應尤もな所說と云はなければならない。何故なら、もし形相が統一的であり飽く迄不變だとすれば、形相そのものが、個體を區別する原理となることは出來ない筈で、從つて、個體原理は質料の方面に求めなければならない理だからである。けれども、アリストテレスでは、形相は決して、個體から遊離超越して實在性を持つものでなく、個體そのものの本質的形相なのであるから、その意味に於て、それぞれ個體を異にするに從つて、この本質的形相も異るとも考へられるのである。[9] しかし、一般的概念內容に於て（τῷ καθόλου λόγῳ）同一であるに拘はらず、實在的には、個體的な本質的形相をそれぞれ異ならしめるのは

何であらうか。それはボイムカーの解するやうに、質料そのものの内容或は本質規定等によるものでなく、數的な區別に過ぎないものであらうか。卽ち一般的な形相が、種々に區別された質料と結びついて實存すると云ふことによつて個體が成立つと云ふのである。例へば、カリアスとソクラテスを異ならしめる原理は、同一た形相がカリアスの骨或は肉と結びつき、ソクラテスの場合は、異つた骨や肉と結びつくことによつてであると考へられないでもない。[10] しかし、第一質料は本來無限定的なものである。それが單に數的に分たれると云ふだけで、形相の實在的多數化を生じ、且又個體を個體たらしめることが出來ると考へるべきであらうか。カリアスとソクラテスが、共に人間であると云ふ形相的本質に於て同一であるが、此形相が實存するための基體となる骨・肉その他の質料の差が兩者を存在上區別すると考へることは、一應首肯し得るが、この場合、骨・肉その他の質料的基體と考へて居るものも、實は、無限定的な第一質料でなく、所謂最近質料であり、既に形相的限定を受けて居る質料であることを考慮すべきである。單に第一質料の種々の異つた部分と云ふやうなものでない。元來第一質料なるものは、感覺的個物の凡ての形相的變化の基底にあつて、その變化を可能ならしめるヒポケイメノンであるが、それ自らは常に不變なもので、只否定的にのみ定義され得るものである。それ故、すべての個體は、勿論これを成立の基體として持つが、それだからと云つて、これが直に個體的原理と云ひ得る譯ではない。寧ろ質料それ自體には、個別的實體を個別的たらしめる根據はなく、却つてこれを限定して最近質料とする形相の側にその原理を求めなければならないやうにも思はれる。

確かにアリストテレスは、既に述べたやうに、形相の實在的多數化を說いて居るのであつて、形相は、その概念的本質から云へば、一般的であり、不變的と考へなければならないに拘らず、その實存上から云へば、それぞれの個體の形相的本質として、それぞれの個體に特有な形相をなすとも考へられ、その限りこの形相は變化に從屬すると見られる。

此點について多くの示唆を與へるものは、ブリンガーの解釋である。[11] 彼は、個物と一般、形相と質料との關係につ

いてのツェラーの見解を批判し、前者については、アリストテレスの普遍は、只個別に於てのみ實在性を持つこと、形相は、知識の中にある限り、客觀的には無限定者であり、只個別的實存に於てのみ、その限定性と現實性を持つものであることを高調し、後者については、實體的存在の根據を只質料に於てのみ見出さうとするツェラーの見解に反對し、質料のみが、絶對的に、個別性の根據なのではない、形相も同樣であると說き、ツェラーの本文解釋の誤謬を指摘してゐる。

思ふに、アリストテレスの體系の根本に横はるこの重大なアポリアをエウポリアに轉ずる道は、非常に荊棘に滿ちたものであることは確かである。何故なら、こゝには、哲學的論究を必要とする最も重大な問題の一つが横はつてゐるからである。我々はブリンガーと同じく、アリストテレスは、個性原理を單に質料に認めたとする見解には贊成することは出來ない。さりとて、彼の云ふやうに、個性原理を單純に質料と形相の二者に認めたと云ふことを以て滿足すべきであらうか。確かに、彼の主張するやうに、アリストテレスは、形相の一般性と本質は、これを概念的抽象的普遍性に求めず、個體の本質的構造契機として認めたのであり、その限り、個體に特有な性格を持つものと考へられたとしなければならぬ。質料も亦、個體を構成する構造契機と考へられる限り、個體に特有な性格を持つべきであり、單に、無限定的な質料の部分と云ふ如きものであるべきではない。しかし、一方形相は、本質的一般性として、不變性を持つと考へられ、又質料も、本來無限定的な、有ゆる限定の母體として不變的と考へられるに拘らず、他方では、それぞれの個體に於て、それが實存を保ち、實存する限りに於ては、それぞれ個體に特有な性格と變化を持たなければならない。この矛盾は如何にすれば解決し得られるであらうか。

思ふに、この難關を打開し、アポリアをエリポリアに轉ずるには、單に、アリストテレスの片言隻句に捕はれることなく、彼の存在論の根本的思惟動機に深く入込む用意が必要なのではなからうか。

（未完）

註(1) Met. VII, 3. 1029 a20-21.

(2) Phys. I, 9. 192 a31-32.

(λέγω γὰρ ὕλην τὸ πρῶτον ὑποκείμενον ἑκάστῳ, ἐξ οὗ γίνεταί τι ἐνυπάρχοντος μὴ κατὰ συμβεβηκός)

(3) Met. VII, 4. 1029 b13-14.

(4) ibid. 1030 a1-7 ; Ross, op. cit. II. Comm. 169 f.

(5) ibid. VII, 5. 1031 a11-14. (6) ibid. VII, 8. 1034 a7-8.

(7) Vgl. Geyser, op. cit. S. 77.

(8) Bäumker, Das Problem der Materie in der griechischen Philosophie. S. 283 f.

(9) Met. XII, 5. 1071 a27-29. (10) ibid. VII, 8. 1034 a5-8.

(11) A. Bullinger, Aristoteles' Metaphysik in Bezug auf Entstehungsweise, Text und Gedanken klargelegt bis in alle Einzelheiten, S. 45-49.